

昔は人が綿入れ着たものだが、今は家が綿入れを着るんだない、

## 米寿を迎えたユーモアおばあさんのいる断熱住宅改修物語

◇建設地 福島県須賀川市 ◇施工 紀洋建設(株) 福島県須賀川市

須賀川市は福島県南の中心都市郡山市の南に隣接する人口 6 万の街。少し前まではウルトラマンの生みの親、円谷監督の出身地として知られ、夏休みともなるといろいろなイベントが行われ大勢の子供連れて賑った。古くは松尾芭蕉が「風流のはじめやおくの田植え歌」と奥の細道で詠んだ処でもある。(白河の関を越えていよいよみちのくの旅が始まるぞと期待に胸を弾ませていると、どこからか田植え歌が聞こえてくるというような意)市内に阿武隈川が南北に貫き、その東西にのどかな田園風景が今も広がる。

そんな中に建つ築 70 年の旧家が姿形(すがたかたち)をそのままに高断熱住宅として昨年 11 月に改修工事が行われ再建された。建築したのは(株)紀洋建設、施主は菊地武光さん(65 歳)。工期は約 6 ヶ月。旧家屋に使われていた古材を使い、間取りもほぼそのままの形で復元された。断熱工事は計画通り成功し、今冬は暖かく暮らす事が出来た。



その工事を一部始終見ていたそこに住む 88 歳になる菊地ツメさんは、「昔は人が綿入れ半纏来たものだが今は家が綿入れ着るから暖かいんだない」と言ったという。私は、家に綿入れ半纏を着せるという表現が面白く、目からうろこが落ちるような新鮮さを感じ、現地を訪ねた。

第 5 回になる今回の断熱改修物語は須賀川市の古民家再建の話しをレポートする。

菊地家はこの何年かずっと 3 人暮らし。二反歩(600 坪)の屋敷に 70 坪の家に住む。子供達はそれぞれ独立し外で暮らしている。当分戻る気配はない。



武光さんは定年で職場を離れることが近くなった 4～5 年前頃から、家の建て替えをどうするか決めかねていた。子供達は家族も少ないのだからこぢんまりした家に新築したらどうかと話してくる。しかし、永年暮らしたこの家を今風の住宅に変えることには何となく気が乗らなかった。今住んでいる家を壊して亡くしてしまうのかと思うと、考える度に寂しい気分にもなった。それに土台こそ腐っているようだが柱や梁はまだまだ長持ちしそうでよく見れば立派な木材である。いかにも勿体ないと思うのだった。ただいろいろなものも古くなってそろそろ取り替え時期であることは間違いないし、冬は年々寒くなるような気もするので、それも何とかしなければならぬと思うのだった。

そうこうして時を過ごしていたある日、近くに出来た住宅展示場に古材を使ったモデルハウスがあることをツメさんが知って武光さんの奥さんと訪れた。その住宅は室内に多くの木を表し、香るような真新しい柱や梁が組み立てていたが、中に、黒ずんだ古材が漆喰の白壁にくっきりと浮かんで見えた。ツメさんは黒く磨かれたその木材を見つめ、自宅の柱もこういう使い方ができると思った。気がつくとも室内も床も暖かい。二人は部屋を漂うほんのりとした暖かさに感心した。根本は、その様子を感じ取って古い木材を使いながら、新しい家を暖かくできるという説明を始めた。それが紀洋建設の根本社長との最初の出会である。

それがきっかけで根本は度々菊地家を訪れることとなった。根本には既存住宅を断熱住宅にする改修工事を何件か手掛けた実績があった。それらを通して高断熱住宅を新築する仕事とは別な充実感を感じていた。それは、古いものに断熱という技術を加えることで見違えるように暖かさが増し、まるで魔法をかけたように変わるので、施主から専門家として畏敬される喜びでもあった。

古い木材の多くが使えることそしてちゃんとした断熱工事をする事で昔のように寒くなることはないこと、そして何よりも昔の家をなくさないで欲しいという、根本の熱い思いが伝わって菊地さんは再建することを決めた。

全体の工事計画が組まれた。まず瓦を剥がし(瓦は再利用する)、家屋を一端持ち上げて腐りかけた土台を総入れ替えし、土間の防湿とべた基礎工事をを行う。軸組はそっくりそのまま残し、傷んだ木材を取り替え耐震補強する。間取りは基本的に変えない。断熱工事は床に高性能グラスウール32K80mm, 壁は土壁120mmを残し外にグラスウール 32K品35mmを付加断熱する。天井断熱になる部分はグラスウールの吹き込み。屋根は厚くとれないので性能の高いネオマフォーム50mmにする。サッシはすべて断熱サッシ+ペア硝子に取り替える。内部の建具類も使えるものは意図して使うこととして総予算は2000万円を目標にした。



そうして平成18年5月、築70年経った菊地家の断熱再建工事が始まった。まず家屋を曳いておき、腐りかけていた土台を取り替え、柱、束を総点検し弱った部分を外し、取り替え、この間に土間防湿シートを全面に敷き、べた基礎工事まで一機に施工した。こうして基礎を固め、家屋を再設置し、建て方を終えた。



長年たまった煤に厚く皮膜された柱や梁は、建てて組んで登って、洗いながら拭いた。ボロボロとホコリが落ちると、見るからに剛直な木材が、黒ずんだ鈍い肌つやを出して現れた。このあたりでは昔良質な地松がとれ住宅に使われたという。予想通り、古材は丈夫なもので今後長年耐用すると思われた。



ツメさんは一連の工事に強い関心を持ち毎日現場に詰めていた。床に断熱材を入れ、防湿気密シートが張られる作業を見ていて、今までの家は床下からスースー風が入って寒かったがこれなら風も入らないから暖かそうだと納得した。



ただ屋根天井の断熱工事に入ってからちょっと怪訝な表情が続いた。昔、ツメさんが嫁いだとき、この家は新築2年目だった。その頃は天井も張らず囲炉裏の上にある煙出し小屋根を下からのぞくと外の光が見えたのだそう。冬になるとそこから小雪が舞ってきて、寒くてしょうがないので天井を張ったという。だから、今回、天井を張らず屋根までホラホラにしたら又昔のように寒くなるのではないかと、そう心配するのだった。根本が断熱材を見せて、天井にも屋根の勾配部分には性能の高い断熱材を張るのだと、かくかくしかじか説明をするのだがその言葉は半信半疑にしかとらなかつたようだ。

壁は土壁で4寸柱の間にしっかり込められていた。根本はこれなら壁内に気流が走ることもないと判断し、土壁を残し、外側にグラスウールボードを35mm付加断熱した。燃えない断熱材を壁に張ることで外からの火災にも安心できる。



サッシはアルミ複合の断熱サッシ+ペア硝子に総入れ替えし、床壁天井の断熱気密工事は完了した。

菊地さん一家は当面は高齢者3人が住む。根本は玄関脇の壁に手すり代わりにハンドレールを付けたり、廊下から食堂台所へのバリアをフリーにし、和室からの段差をわざと大きくして気付きやすいように仕上げで加齢対応とした。寒いところをなくすることも高齢者に対する健康的な配慮としては重要なバリアフリーといえるが、日常は居間、寝室から

洗面トイレそして浴室までの経路に段差がなく、壁伝いに手を掛けられるものがあると高齢者にとっては暮らしやすい。こういう改修工事は、断熱と耐震、そして加齢対応は重要なポイントになる。

工事は予定より延びて11月中旬にすべての工事が完成した。ツメさんは、天井に組まれた柱や梁をみて70年前嫁いできた頃を思い出したという。「あの頃は新しかったから白い木の色をしてきれいだったがすっかり煤けて真っ黒になってしまった。私と同じだない」といって笑う。

間口の広い玄関を開け、土間に立つと居間の中央に切られた大きな掘りごたつが目に入る。その上には漆喰壁の白地を背景に黒々とした太い梁が頭上高く縦横に走っている。ここはかつて囲炉裏端で、幾代もの家族が暖をとったり煮炊きをした時代もあったことだろう。薪をくべた煙が木材を燻煙し、煤で真っ黒くなった。畳の間は三部屋が続いていて板戸で仕切られた奥の部屋は歴代の当主が起居していたのであろうか、何となく厳かな雰囲気がある。板戸は五尺七寸、今の人にはちょっと低いのが面白い。欄間にかけてられた代々の先祖がこの家を見つめている。

70年前建てられた時もおそらくこんな雰囲気だったのだろうが、その時と根本的に違うことがある。それはこの家が今や断熱住宅に生まれ変わったことである。昔の雰囲気は残したい、しかし、広くて暗くて寒いからいやだというのが当世の風潮である。それを解決するのが高断熱化する断熱リフォームである。旧い家の雰囲気をそのままに、広くても明るくて暖かく暮らせる家になるのである。菊地家は、そういう断熱技法をもった工務店によって再び生き返ったのである。

完成間もない11月の末、70年前の姿になったこの家にジャズのリズムが流れた。根本が、再生なった古民家を記念して、地元で活動するジャズバンドのコンサートを開いたのだ。当日はちょっと肌寒い日だったのだが、60人も入った室内は暖かすぎる程になった。

ツメさんは晴れの姿で会場の人にこう挨拶した。「お陰様で昔の家がそのまま新しくなって若い頃に戻ったような気分だ。昔の家はうんと寒かったけれど、今度の家は何と暖かいことか。昔は人が綿入れを着たものだが今は家が綿入れを着るんだものない、暖かいわけだわ。」会場に大きな拍手が湧いた。

長男の武光さんに旧家屋を遺してみようかと聞いた。「息子が言うように新しい家を小さく建てようかと随分悩みました。しかし今、こうして出来上がってみると壊さないで本当によかったと思います。あれを壊していたら自分の今までの人生までみんな亡くしてしまったような気分になったかも知れない。それこそ取り返しがつかなかった。」としみじみ語ると、傍にいた奥さんが「私の実家は今はやりの家に建て替えたのですが、私にしてみれば実家が無くなってしまったようで寂しい気持ちです」と話した。

菊地家の庭に立って見わたすと前に広がる田園の其処ここに大きな屋敷をもった家々が点在する。どの家もいわゆる在の農家であろう。豪農や豪商が建てた壮観な家ではない。しかし一つ一つの家々に、それぞれの家族だけの歴史があり人生がある。菊地家が旧家屋のまま再建されたことで将来一番喜ぶのは、こぢんまりした家を新築したらといった長男ではないだろうか。やがて、父と同じ年代になったとき、そのことを実感すると思う。

帰り際、ツメさんがニコニコして私達を喜ばせる話しをしてくれた。「人間は正直な動物だから暑いときは涼し



いところへ、寒いときは暖かい所へ集まるぞい。私は、隣に隠居部屋を作ってもらったらそっちへばかり行って  
いたが今度は今まで一番寒かった母屋へばかり来てるもんない」88歳とは思えない笑顔だった。

田植えを終えたばかりの新緑が広がる風景は、今にも田植え歌が聞こえて来そうな景色だった。ひょっとして  
ツメさんも娘時代には田植え歌を歌ったかも知れない。新しい家で百歳まで長生きて欲しい。(終わり)

(この文章は2007年6月にマグレポートに掲載されたものです)

2012.2.9 新住協 事務局長 会沢健二

